ハンナ・アレントの全体主義批判における複数性の喪失と再生

―教室における生徒間の関係を読み解くための準備として―

樋　口　大　夢

１．はじめに

学校、特に教室は全体主義化しているのだろうか。より限定して言うのならば、今日の生徒間の関係は、全体主義下にあった人と人の関係と類似性があるのだろうか。本稿では、ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の全体主義批判に注目することで、今日の教室内における生徒間の関係を描き出すための準備作業を行う。

全体主義という言葉の定義を一つに定めることには困難さがある。本稿で着目するアレントは、全体主義をナチス支配下のドイツやスターリン支配下のソ連として位置付ける。第２章で詳細に検討するようにアレントは全体主義を「新しい統治形式・国家形式」と分析し（川崎 2014：398）、従来からの暴政や独裁とは異なるものだと指摘する。また、森川輝一によれば、アレントと同時代の全体主義研究をリードしたカール・フリードリッヒ（Carl Joachim Friedrich, 1901-1984）が現代の独裁政治を全体主義と特徴付け、道徳の問題を考慮しないのに対して、アレントは全体主義の特徴を道徳の問題が崩壊することに見出していることを指摘する（森川 2008：118）。全体主義を学校と結びつけたものとして、内藤朝雄の研究がある。内藤はアレントが位置付けたようにナチズムやスターリニズムを国家全体主義とした上で、それに加えて国家規模ではなく学校や会社のような組織に全体的にそこの構成員が隷従するようになることを目的とする中間集団全体主義を主張する（内藤 2009：252f）。この分析を基に内藤は、コミュニケーション能力によって序列が付けられたスクールカーストにより、子どもが自らの「キャラ」を演じていることを指摘し、学校から始まる「再」全体主義化を指摘する（内藤 2015：22）。また小玉重夫は、スクールカースト小説を用いて、アレントの全体主義分析から見出される全体主義によって、創出される難民とスクールカーストを生み出す学校空間を結びつけて考察している（小玉 2013：34）。では学校、教室という共同体[1]は、同質性を助長し、異質な者を排除する空間なのだろうか[2]。

教室に「みんな仲良くしよう」といったスローガンが掲示されることがある。このスローガン自体は教育にとって本来有意義なものである。しかしながら、このことは逆説的に全体主義[3]を招く危険性を孕んでいる。つまり、仲良くできない生徒の排除やグループから排除されないために集団に隷従せざるを得ないことにつながる危険性がある。この危険性はアレントの全体主義批判に着目することで明らかになるだろう。ここで本論の立ち位置を確認する。そもそもアレントの全体主義批判と学校を結びつける先行研究として小玉の研究があることは先に言及した。小玉は、アレントが言及する難民化が（本稿第２章参照）、今日の社会に示唆的だと主張する。加えて小玉は、アレント自身がこの難民状態を必ずしも否定的に評価していないことを引き受け、難民状態が思考する者へと変わる契機を含んでいることに着目する。その上で小玉は、この難民性を抱えた思考活動をする者が「公共的世界に参加する市民」として現代の市民像を描いている（Cf. 小玉 2013：198f）。

しかしながら本稿の3-1-1で示すように、アレントは全体主義下において難民が思考活動をする者に変わることはないと指摘する。このアレントの指摘を踏まえると、学校、特に教室が全体主義化しているのであれば、生徒は思考する者へと変わることはない。したがって、教室が今どういう状況なのかということを描き出す必要がある。そこで本稿では、小玉の視点とは異なる仕方でアレントの全体主義批判に着目し、学校や教室を描き出すための準備を行うことを目的とする。以下ではまず、アレントが全体主義をどのように見て、どのように批判したのかを『全体主義の起原』を中心に整理する（2）。次いで、

アレントの分析にしたがい、全体主義を構成する重要な二つの要素の確認をする。一つは「独りぼっちであること（loneliness）＝見捨てられていること（Verlassenheit）」[4]についてであり、もう一つが「大衆（masses/Masse）」である（3）。そして、これらの要素を分析した後、アレントの全体主義批判から全体主義に陥らないための糸口を見出す（4）。最後に今までの議論を踏まえ、アレントの見解から学校や教室像を描き出すための示唆を引き出す（5）。本稿を展開する際に重要な用語となるのは、アレントが主著の『人間の条件（*The Human Condition*）』（ドイツ語版は『活動的生（*Vita activa*）』）で定義付ける「複数性（plurality/Pluralität）」である。

２．アレントの全体主義批判

本章では、アレント自身による全体主義分析に加えて、彼女の著作である『全体主義の起原』[5]に対する先行研究からアレントが全体主義とどのように向き合っていたのかということを明らかにする。アレントの全体主義分析は「かつてだれもとらえなかったような全体主義的経験の顕著な特徴をとらえた」という評価がある一方で（Wolin 2001：33=2004：66）、『全体主義の起原』における構造の複雑さからアレントの指導教官でもあるカール・ヤスパース（Karl Theodor Jaspers; 1883-1969）は、全部を理解することの困難さを指摘している（EUtH：9=1, xiv-xv）。そこで本章では、アレントの全体主義分析すべてを扱うのではなく、次の二点に絞って検討を試みる。一点目は全体主義体制が他の専制、暴政や独裁と何が違うのか（2-1）、二点目は全体主義が我々人間をどのように変えてしまうのかということに重点を置いて検討する（2-2）。

2-1. 新しい統治形式・国家体制

『全体主義の起原』で描かれる全体主義体制の国家は、従来の国家体制とは異なる点を有する。アレントは『全体主義の起原』でこの点を明らかにしている。アレントは『全体主義の起原』の英語版13章「イデオロギーとテロル-新しい統治形式」とドイツ語版13章「イデオロギーとテロル-新しい国家形式」において、全体主義が他の専制、暴政や独裁と異なるまったくの「新しい統治形式・国家形式（A Novel Form of Government/eine neue Staatsform）」であることを指摘している（OT：460; EUtH：703=3, 282f）。加えて川崎修が指摘するように、アレントは「新しい統治形式・国家形式」が「『イデオロギーとテロル』の支配によって特徴づけられる」と『全体主義の起原』の中で位置付けている（川崎 2014：398）。ここで、従来の国家体制、つまりは他の専制や暴政、独裁とアレントが位置付ける「新しい統治形式・国家形式」とは一体何が違うのだろうか。この問いに対して藤田省三のアレント分析が示唆を与えるだろう。藤田は『全体主義の起原』を通して、アレントが位置付けた「新しい統治形式・国家形式」を「難民（displaced persons）の生産と拡大再生産を政治体制の根本方針とするもの」として分析する（藤田 1997：46）。換言すればアレントは、「難民」を生産することによって維持あるいは刷新される政治体を「新しい統治形式・国家形式」として位置付けている。ではここで言われている「難民」とは何を指すのだろうか。あるいはどのようにして「難民」は生産されるのだろうか。藤田はアレントが『全体主義の起原』で定義付ける「難民」を以下のようにまとめる。

> ［難民は、］「市民としてのすべての法的保護を剥奪されたかもしくは喪失した者」であるから、「生産された難民」は勿論「剥奪された者」であり、かれらが、もし少しでも「法的保護」の切れ端しでも得たいと思うなら、「犯罪者となる以外に方法はない」。言い換えれば、監獄法の一定の保護規定、あの最小限の生存保障規定に頼る以外には、如何なる法の保護からも見捨てられている。そういう一切の社会の内に居場所を持つことを許されない存在が「難民」であった（藤田 1997：46［　］内引用者）。

「難民」は、以前は市民として扱われていた者達から市民権を奪うことで生産される。そして、生産された「難民」は罪を犯した後に罰を受けるという逆説的な意味でしか法の保護を受けることができない。したがって、「難民」は基本的に市民としての何もかもを失った法の外の人間displaced personなのである。

このように全体主義は、多くの人を抱え込んでいくような従来から存在する専制、暴政や独裁とは違うことが分かる。そして全体主義は、こうした「難

民」を生産し、再生産を繰り返す体制として理解できる。そうした意味でアレントが言うように全体主義は「新しい統治形式・国家形式」なのである。

2-2. 人間の本性を改造する全体主義

全体主義は前節で確認したように、「新しい統治形式・国家形式」という側面を持つ。加えて人間を破壊する側面、つまり、人間の本性を根底から改造する要素を含むものとしてみることができる。本節では後者の人間を改造する側面にアレントの分析から着目したい。

全体主義は、人間を破壊する契機を孕んでいる。換言すれば、人間の本性が改造されるということを意味する。アレントは『全体主義の起原』の中で以下のように述べる。

> 全体主義イデオロギーの本来の目標は、人間存在の外的条件の改造でも社会秩序の革命的な変革でもなく、人間の本性-これは今のままではいつまでも全体主義の過程に対立する-そのものの改造なのだ（OT：458；EUtH：701=3, 278）。

全体主義とは、人間の本性を変えることを目的とする。では、ここで言われている人間の本性とは何であろうか。アレントが意味付ける人間の本性は、人間の複数性[6]と自発性（spontaneity/Spontaneität）から構成されるものだとマーガレット・カノヴァンは指摘する（Canovan 1992：27=2004：39）。カノヴァンが指摘するように、人間は複数性をもっており、誰一人として同じ人間はいない。そしてその各々異なる人間は、誰もが新しい何かを自発的にはじめることができる（Canovan 1992：25=2004：37）[7]。アレントの分析において、全体主義はこのような人間を改造する。つまり全体主義は、人間を人間でないものに変えてしまうことを目的としている。その具体例としてアレントが取り上げたものが、全体主義下、つまりはヒトラー政権下におけるドイツ人の振る舞いであった。すなわち、第二次大戦期のドイツは、人間の本性を改造することで、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥った人々を造り出し、そうした人々を強制的に網目の隙間が無くなるくらい結びつけて「大衆」を完成させて全体主義運動を加速させたのであった。支配者の視点に立てば、操作しやすい民衆を造り出すことを可能にさせるものが全体主義であった。ではそうした操作しやすい民衆はいかにして創り出されるのだろうか。換言すれば、人はどのようにして全体主義に陥るのだろうか。

3.「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」

人はどのようにして全体主義に陥ってしまうのだろうか。先の第２章では、アレント自身の全体主義分析を中心にして、全体主義がこれまでの政体とは異なる、全くの「新しい統治形式・国家形式」であることが指摘され、加えて複数性と自発性から満たされる人間の本性を改造することを目的としていたことが明らかになった。そこで本章では、全体主義によって本性を改造された人間に着目する。アレントはその人間を「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある状態にあることと、「大衆」であることとして、位置付けている。アレントはこの二つの要素が全体主義を加速させるものとして分析していた。したがって本章では、はじめに「独りぼっちであること＝見捨てられていること」についてのアレントの見解を分析し（3-1）、次いで「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥った人々を強制的に結び付けた「大衆」のアレントによる議論をそれぞれ確認する（3-2）。

3-1.「独りぼっちであること＝見捨てられていること」

本節では、アレントの全体主義分析における重要な概念でもある「独りぼっちであること＝見捨てられていること」の整理を行う。はじめに人が「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥ることをアレントがどのように分析していたのかを確認し（3-1-1）、次いでそれが人間の複数性にどのような影響を与えるのかを検討する（3-1-2）。

3-1-1.「独りぼっちであること＝見捨てられていること」とは何か

アレントは「独りぼっちであること＝見捨てられていること」をどのような状態として分析していたのだろうか。またどのような時に人は「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥るのだろ

うか。アレントは以下のように表現する。

> どのような個人的な理由によるのであれ一人の人間がこの世界から追い出されたとき、もしくはどんな歴史的・政治的な理由によるものであれ人間がともに住んでいるこの世界が分裂し、互いに結ばれ合った人間たちが突然自分自身に投げ返されたときである。(EUtH：728f=3, 321)

アレントはこのような状態のとき「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が起こると述べる。また、アレントは「独りぼっちであること＝見捨てられていること」を「私［「独りぼっちであること＝見捨てられていること」］は、真の意味で一人であり、すべての他者から見捨てられているのだ」と定義付ける（OT：476；EUtH：728=3, 320f［　］内引用者）。この一文から分かるように、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が真の意味で他者との関係を切られていることを意味していると理解できる。つまりこのことは、人が友人や社会、国家などの様々なものとの関係が切られていることを意味する。加えて、アレントが他者というタームを用いている意味には上述した関係以外により重要な関係までも切断されていることを示唆している。それは、人とその人自身との関係の切断である。

アレントは、自分自身との関係の切断について述べる際に、「一人であること（solitude/Einsamkeit）」と「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が違うことを明確に主張する（OT：476；EUtH：728f=3, 320f）。それぞれは何が違うのか、アレントはこの違いを「自己内対話（dialogue between me and myself）」をすることができるかできないかということで区別を設ける（OT：476）。また、アレントは自ら言い換えて、その状態を「一者の中の二者（two in one）」の状態であるかないかと分ける（OT：476）。アレントは、「一人であること」を「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と比較して評価している。なぜならば、「一人であること」は思考（thinking/Denken）[8]をすることができるからだ（OT：476；EUtH：728=3, 320）。一方で、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」というのは、思考することができない。つまり、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」というのは、人や社会との関係を切られたことに加え、思考をすることすらできない状況にあることを意味する。つまり、全体主義は真の意味で人間を一人にする（OT：476；EUtH：729=3, 321）。アレントは「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が「一人であること」に、あるいは「一人であること」が「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にそれぞれ変わる契機を孕んでいることを指摘する（OT：476f；EUtH：728=3, 320）。しかしながら、全体主義下においては、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が「一人であること」に変わることがないことも示唆する（OT：478）。全体主義ではない通常の状態では、この変化はありうる。しかしながら全体主義下においては、人は誰とも共にあることはできず、思考することもできないため、「一人であること」に変わることはない。では、この状態に陥ると人はどのようになるのだろうか。

3-1-2.「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と複数性

前項では、アレントの「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥った状態を確認してきた。人は全体主義下では、人との関係が切断され、加えて自分との関係までも奪われる。その結果、人は思考することすらできなくなるのである。では人がこの状態に陥った時、どのような変貌を遂げるのか。本項では全体主義下において、その状態が人間の複数性を破壊することへとつながることを示す。

ここで再び「一人であること」に注目したい。前項で指摘したように、アレントは「一人であること」が「独りぼっちであること＝見捨てられていること」になる可能性があることを指摘していた。同様にして逆である「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が「一人であること」になる可能性も示唆していた。しかしながら、これらが同一のものではないことを強く主張していた。ではこの違いが何を意味するのであろうか。

> 一人であることの内には実は私は決して一人ではない。私は私自身と共にあり、そして身体的に他のものと交換不可能の特定者には決してなり得ないこの自己は、同時にまた各人でもあ

る。まさに一人であることの思考は弁証法的であり、各人と交わっている。これは一人であることの自己分裂性であって、この中で私はつねに自分自身にひき戻されながらも、決して一者として、そのアイデンティティにおいて交換不可能なものとして、本当にかけがえのないものとして私を経験し得ない。まさにこの一者として、交換不可能なものとして、かけがえのないものとして私を認め、私に話しかけ、それを考慮してくれることで私のアイデンティティを確認してくれる他の人々との出会いによって、私は一人であることの内部分裂と多義性から救い出される。彼らとの関係に組みこまれ彼らと結びついてはじめて、私は現実に世界における一者であり、他のすべての人々から私の持ち分の世界を受け取るのである（OT：477；EUtH：728=3, 320f）。

ここにおいてアレントは、「一人であること」が、最終的に他の人と共にあることへとつながることを示唆している。一方で「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある者は、「交換不可能なものとして、本当にかけがえのないものとしての私を認め、私に話しかけ、それを考慮してくれることで私のアイデンティティを確認してくれる他の人々との出会い」がないのである。前項で確認したように、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある者は、真の意味で一人なのだ。アレントの分析においては、「一人であること」と「独りぼっちであること＝見捨てられていること」には他人との関係という意味では雲泥の差があることが分かる。

では改めて、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」は人間に対してどんな弊害をもたらすのであろうか。それは端的に言えば、人間の複数性の破壊を意味する。全体主義下の「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある状態というのは、まさしく他者性と差異性を失っている状態を指す。「独りぼっちであること＝見捨てられていること」の状態においては、人は他人と異なっていることを認識することができない。なぜならば、先にも確認したように「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある人は、他者との関係が切断されている。つまり、他者を認識することができない。また、人が他者を認識することができないということは、人との差異を表すことができない。なぜならば、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」においては、差異を表したことを認めてくれる人がいないからだ。したがって、他者性と差異性から構成される人間の唯一性を表すことはできない。つまり、アレントが『人間の条件』で定義した唯一存在の逆説的な人間という複数性の定義を満たすことができない。したがってアレントの議論において、人間の複数性を破壊するものとして「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が位置付くのである。

3-2.「大衆」

前節では、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が、人間の複数性を破壊するものとして位置付くことが明らかになった。

そこで本節では、前節で確認した「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある人々がいかにして「大衆」へと変容し、全体主義を加速させたのかをアレントの分析にしたがって明らかにする。伊藤洋典が指摘するように、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」としての「大衆」は全体主義の土壌となる（伊藤 2004：47）。では、「大衆」はどのようにして全体主義を加速させたのか。この問いに示唆を与えるのが、テロル（terror/Terror）であろう。したがって本節では、まず「大衆」の構成について確認し（3-2-1）、テロルを用いることで「大衆」が人間の複数性にどのような影響を与えるのかということをアレントの分析にしたがい明らかにする（3-2-2）。

3-2-1. 全体主義下における「大衆」とは何か

そもそも全体主義運動を支える「大衆」とは何か。アレントは大衆を「共通の利害で結ばれてはいないし、特定の達成可能な有限の目標を設定する個別的な階級意識をまったく持たない」集団として位置付ける（OT：311；EUtH：502=3, 11）。つまり「大衆」は、政治的な意味合いにおいてどこにも帰属する場を持たない人々のことを意味するのである。アレントは特に、ヨーロッパの大衆についてこのように分析する。

ヨーロッパの大衆は、すでにアトム化していた社会の解体によって成立した。この社会におい

ては、個人間の競争と「独りぼっちである＝見捨てられている」状態の問題を一定の限度内に抑えていたものは、各個人は生まれると同時に一つの階級に属し、成功や失敗とは関わりなくその階級を故郷として終生そこに留まるという仕組みだけだった。大衆社会の中の個人の主たる特徴は残酷さでも愚かさでも無教養さでもなく、他人との繋がりの喪失と根無し草的性格である（OT：317；EUtH：513=3, 25f）。

アレントが言うように、「大衆」はどこかへの帰属を無くした存在から構成されるのである。現代の「大衆」というのは「共同の世界が完全に瓦解して相互にばらばらになった個人から」構成される（EUtH：515=3, 27f）。換言すれば、人と共にあることができなくなっているのが「大衆」である。「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある状態の人々から「大衆」は構成される。一方で、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」は互換的でもある。加えて、帰属の無くした存在としての「大衆」はあることをすることによって「独りぼっちである＝見捨てられている」存在へと完全に陥る。それは、他人を密告する（volunteer information/denunzieren）ことである。全体主義下では容赦のない粛清が常に存在する。そしてこの粛清から生き残るための唯一の方法は、他人を密告することで自分の信頼性を高める以外に方法はない（OT：323；EUtH：523f=3, 38f）。また、全体主義下において、親しい友人を持つことは、より危険である。なぜならば、人は友人とより親密になることでうっかりと本心を漏らしてしまう可能性がある（OT：323；EUtH：523f=3, 38f）。もしも友人によって自分が密告されたら、そのことが原因で自分の身を亡ぼす可能性が高まる。つまり、誰かが自分を密告する可能性を孕んでいる。したがって、全体主義下における「大衆」は誰一人として信用することができない。ここにおいて、「大衆」は「独りぼっちである＝見捨てられている」状態にさせられるのである（EUtH：524=3, 40）。

しかしながら、なぜ全体主義下の人は他人を密告して自ら「独りぼっちであること＝見捨てられていること」になるという選択をするのだろうか。そこには先に少し触れたように粛清と大きく関連があった。そこでは、自らが粛清されないための方法として密告が位置付けられていた。このいつ起こるか分からない粛清やその恐怖をもたらしたものが、まさしく全体主義のテロルである。

3-2-2.「大衆」・テロル・複数性

前項では、「大衆」がどのようにして構成されるのか、また、全体主義下における人自らが「独りぼっちであること＝見捨てられていること」になる選択をせざるを得ない状況にあることを確認してきた。本項では、この選択に大きな影響を与えるものとしての粛清とその恐怖を意味するテロルについて検討していきたい。そして、テロルが複数性に与える影響をアレントの分析から明らかにする。

なぜ人々は、密告するのだろうか。それは自らの粛清を避けるためであることは前項で確認した。換言すれば、政権から信頼を得るためにはやむを得ないのである[9]。政権に対して、他人のことを考慮せずに忠誠を誓うことこそが、生きる手段であった。全体主義政権は、この粛清とその恐怖、まさしくテロルを上手に使うことで人々を「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥らせていた。

ではなぜ、全体主義政権がテロルを用いたのか。換言すれば、全体主義政権がテロルを用いることにはどのような意味があるのだろうか。それはテロルを用いることが「大衆」の操作を容易にするからである。テロルは、多くの人間を巨大な一人の人間にしようとする（Cf. OT：465, 466；EUtH：714=3, 298, 723=3, 312）。つまりアレントによれば、「大衆」はテロルを用いられることによって一人の人間として振る舞わざるを得ない。テロルが与える恐怖や粛清によって人は、全体主義政権が思ったように行動する。換言すれば、人々を強制的に結び付けるものとしてテロルが役目を果たしている。

ここにおいて、強制的に結び付けられるということは何を意味するのだろうか。それは、「人間のあいだの一切の関係をなくしてしまう。他の人々とぴったりくっつけられてしまいながら、各個人は完全に他から孤立させられている」ことを意味するとアレントは言う（OT：466；EUtH：723=3, 313　強調原文）[10]。テロルで結び付けられる人々は「大衆」であるわけだから、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」にある人々が互いに結び付けられる。換言すれば、結び付けられてはいるが、結び付けられている者同士の関係はまったくないという

状態が、テロルを用いられた「大衆」なのである。

このようにテロルを用いて強制的に結び付けられた「大衆」は、人間の複数性にどのような影響を与えるのだろうか。端的に答えるのであれば、それは複数性の破壊につながる影響を与えることを意味する。アレントは、テロルが複数性の破壊をもたらすことを指摘する（EUtH：727=3, 318）。前節で「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が複数性を破壊する契機を孕んでいることはすでに確認した。その「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥っている人々が「大衆」を構成する。ともすれば、「大衆」も人間の複数性を破壊すると言うことができる。また、アレントは全体主義統治の本質は、全体的テロルであると指摘する（OT：466）。つまり、全体主義自体が人間の複数性を破壊すると言い換えることができる。

では、人間の複数性を守るためにはどうすれば良いのだろうか。換言すれば、どのようにすれば人は全体主義に陥らないことができるのだろうか。

４．複数性への視座ー共にあること・思考・信頼することー

前章までの議論を確認する。矢野久美子によるアレントの『全体主義の起原』分析によれば、「全体主義のテロルは、次々に犠牲者を選び出して自由な行為や言論を抹消し、人と人とのあいだの行為の空間を無化し、人間の共存を破壊する。人々の結びつきやあらゆることへの信頼が失われる」ということが全体主義のもたらす結果であったことが分かる（矢野 2017：78）。全体主義を構成する「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」という二つの要素が、全体主義を加速させて人間の複数性を破壊することが明らかとなった。ここまでのアレントの見解より、全体主義に陥ることの危険性は大いに理解することができる。では、人はどのようにすれば全体主義に陥らないで済むのだろうか。本章では、この問いへの示唆となる糸口をアレントから抽出する。

第３章で確認したように、アレントは「独りぼっちであること＝見捨てられていること」の状態を真の意味で他者との関係が切られている状態であると指摘していた（EUtH：729=3, 321）。そして、この他者には自分自身も含まれており、自分自身と共にあることのできない状態、つまり、思考をすることができない状態を「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と表現していた（OT：476）。アレントは『全体主義の起原』において、全体主義下の「独りぼっちであること＝見捨てられていること」が、いかに悪いものであったかということについては分析する。しかしながら、それを避ける方法を明確に文章として述べることはしていない。では、どのようにしてアレントから「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に陥らない状態を抽出することができるのだろうか。それは、アレントが「独りぼっちであること＝見捨てられていること」批判をする際にすでに示唆されている。

アレントは他者との関係が切断されていることが「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と言っていた。このことを言い換えれば、他者との関係が切断されていないということが大切になる。すなわち、他者と共にあることが重要となる。加えて、思考をすることも大切となる。思考することは、第３章で確認したように「自己内対話」をすることである。そしてこの他者と共にあることと思考をすることができる時、人は「交換不可能なものとして、かけがえのないものとして私を認め、私に話しかけ、それを考慮してくれることで私のアイデンティティを確認してくれる他の人々との出会」いを得ることができる（EUtH：728=3, 321）。したがって、他者と共にあり、思考することができる状態こそが全体主義に落ち込まないために重要な役割を果たすことが分かる。

同様にして第３章では「大衆」についても分析をした。アレントは現代の「大衆」を「共同の世界が完全に瓦解して相互にばらばらになった個人から」構成されるものと指摘し、人と共にあることができなくなっていることを指していた（EUtH：515=3, 27f）。そして「大衆」と「独りぼっちであること＝見捨てられていること」に互換性があることも確認してきた。この「大衆」は、テロルによる粛清と恐怖が原因で強制的に結び付けられ一人の人間のように振舞わざるを得なかった。このような「大衆」は、他人を密告することで自分の信頼性を高め、全体主義下を生き残る方法を探っていた（OT：323；EUtH：523f=3, 38f）。このことが原因で、全体主義下の人々はお互いを信頼することができない状態に陥っていた。

では人々が「大衆」にならないためにはどうすれば良いのだろうか。先の議論同様に、『全体主義の起原』においてアレントは答えを明確に文章として述べることはしない。しかしながら、暗に示唆は与えてくれている。「大衆」は他者を信頼することができない。換言すれば、他者を信頼することができれば、人々が「大衆」に変わることを防ぐことにつながることを示唆している[11)]。したがって、他者と共にあり、思考をすることに加え、他者を信頼することが全体主義に陥らないためには重要であることがアレントの議論から分かる。

人が全体主義に陥らないためには先に確認したように、他者と共にあり、思考をすることに加え、他者を信頼することが重要であることをアレントの議論から導いた。このことは何を意味するのだろうか。それは端的に述べるのであれば、人間の複数性を保障することにつながることを意味する。アレントは人間の複数性を破壊するものとして、「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」を位置付けてきたことを第３章で確認した。本章では、他者と共にあり、思考をすることに加え、他者を信頼することが「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」に陥らないためには重要であることが示唆された。換言すれば、他者と共にあり、思考をすることに加え、他者を信頼することが人間の複数性を保障することと同義であることが言える。人間の複数性を保つことこそが、全体主義に陥らないためには重要であることがアレントの全体主義分析から導くことができる。

５．おわりにー教室と複数性ー

本稿は、アレントの全体主義批判に着目してきた。そこで、本稿の各章におけるアレントの議論を確認しつつ本章では今日の教室像を描き出す。第２章では、アレントの全体主義分析を基にして、全体主義が今までにない「新しい統治形式・国家形式」であることを確認した。また、全体主義が人間の本性である複数性と自発性を改造するものとしての役割をもっているこことを明らかにした。その上で第３章では、全体主義の重要な要素である「独りぼっちであること＝見捨てられていること」と「大衆」にそれぞれ着目をし、それぞれは、人が他者と共にあることができず、思考することができず、そして他者を信頼することができない状態であることが確認された。第４章では、前章までの分析を基にして、アレントの議論からどのようにすれば全体主義に陥らないで済むのかということを確認した。そして、全体主義に落ち込まないことが人間の複数性を保障することにつながることを導いた。

ここまでアレントの全体主義批判に着目してきたが、ここで改めて本稿の冒頭の問いに戻りたい。それは、学校、特に教室は全体主義化しているのだろうかという問いである。今回のアレント分析と教室を直接結びつけ、教室が全体主義化しつつあると主張することには困難さがある。なぜならば、第二次世界大戦下と今日の教室が同じ状態にあると主張することは、その主張自体に大きな位相のずれがある[12)]。過去から今日まで歴史を遡ってみても、学校においてホロコーストのような大虐殺が起こったことは一度もない。したがって、全体主義批判の議論と教室を直接的に結びつけることには、困難さがある。しかしながら、『全体主義の起原』においてアレントが以下のように指摘することは考慮する必要がある。

> 今日の世界では、全体主義的傾向は単に全体主義統治下の国だけではなくいたるところに見出されるが、それと同様に、全体的支配のこの中心的な制度は、われわれに知られているすべての全体主義体制の倒壊の後にも充分生き残るかもしれないのである（OT：459；EUtH：702=3, 281）。

この引用は、現代の社会自体がいつ何時全体主義に陥る可能性を孕んでいることを指摘している。本稿で取り上げた太田や内藤の指摘も踏まえると、全体主義の状態と今日の学校の状態は位相が違うとして議論を一蹴するのではなく、むしろアレントの指摘を教室で引き受けることには意義があるように思われる。例えば、実際に自分が次にいじめられるのが怖くていじめをしている子どもに対していじめをやめさせることができない。自分がムカついていないとしても、「周りの気持ちが『うつって』内側から意地悪な気持ちになってしま」っていじめを助長してしまう（内藤 2002：20）。あるいは、クラスの全員が同意している中で、一人だけ異論を唱えることが難しい状態にある。また、昨今の黒髪強要の流

れに起因する地毛証明といったような問題と照らし合わせてみればアレントが批判した全体主義は、今日の学校や教室で起きていることと必ずしも遠くないように思われる。つまり、教室内にいる生徒が「独りぼっちであること＝見捨てられていること」や「大衆」と化している可能性がある。換言すれば、教室において子どもの複数性が失われつつあると言っても過言ではない。

アレントは人が全体主義に陥らないために、人が他者と共にあることができ、思考することができ、そして他者を信頼することができるような関係性を築くことが重要であると主張し、そのことが人間の複数性を保障することにつながると指摘していた。学校教育ではこうしたことを常日頃子どもに教育しているはずである。しかしながら、現状の学校における教育は逆の方に向かっている。こうした現象はなぜ起きるのだろうか。この問いに対して、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus, 354-430）のイニチウム（initium）論に由来するアレントの「はじまり（beginning/Anfang）」論で応答することを今後の課題としたい。

〈参考文献〉

アレントの引用部分の訳出に際しては、邦訳を参照し、適宜改訳した。

H. Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago, 1958.〔『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房、1994年。〕（略号：HC）

――, *The Origins of Totalitarianism*, A Harvest Book, 1968.（略号：OT）

――, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft：Antisemitismus, Imperialismus, totale Herrschaft,* Piper Verlag, 1986.〔『新版　全体主義の起原１：反ユダヤ主義』大久保和郎訳、みすず書房、2017年/『新版　全体主義の起原２：帝国主義』大島道義・大島かおり訳、みすず書房、2017年/『新版　全体主義の起原３：全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、2017年。〕（略号：EUtH）

――, *The life of the mind,* Harcourt Brace Jovanovich, 1978.〔『精神の生活』上/下、佐藤和夫訳、岩波書店、1994年。〕（略号：LMT/LMW）

――, *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper Verlag, 1981.〔『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015年。〕（略号：Va）

M. Canovan, *Hannah Arendt：a reinterpretation of her political thought*, Cambridge University Press, 1992.〔『アーレント政治思想の再解釈』寺島俊穂・伊藤洋典訳、未來社、2004年。〕

R. Wolin, *Heidegger's Children：Hannah Arendt, Karl Löwith, Hans Jonas, and Herbert Marcuse,* Princeton University Press, 2001.〔『ハイデガーの子どもたち-アーレント/レーヴィット/ヨーナス/マルクーゼ』村岡晋一・小須田健・平田裕之訳、精興社、2004年。〕

Z. Williams, "Totalitarianism in the age of Trump：lessons from Hannah Arendt", *The Guardian*, February, 1, 2017, p.7.

伊藤洋典「『全体主義の起原』を読む」『情況　第３期第６巻第９号』、状況出版、2004年、42-51頁。

太田哲男「『全体主義の起原』の射程」『情況　第３期第６巻第９号』、状況出版、2004年、30-41頁。

川崎修『ハンナ・アレント』講談社学術文庫、2014年。

小玉重夫『難民と市民の間で-ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す（今読む！名著）』現代書館、2013年。

田中智志『共存在の教育学-愛を黙示するハイデガー』東京大学出版会、2017年。

ティモシー・スナイダー『暴政-20世紀の歴史に学ぶ20のレッスン』慶応義塾大学出版、2017年。

内藤朝雄「中間集団全体主義と自由な社会の構想-いじめ現象からの問い-」『創文　443号』創文社、2002年、19-22頁。

――『いじめの構造-なぜ人が怪物になるのか』講談社、2009年。

――「学校から始まる「再」全体主義化」『週刊　金曜日第1023号』株式会社金曜日、2015年、22-23頁。

藤田省三『全体主義の時代経験-藤田省三著作集６』みすず書房、1997年。

三浦隆宏「全体主義以後の自由論-アーレント政治理論におけるふたつの〈自由〉をめぐって」『倫理学研究　第34号』関西倫理学会編、晃洋書房、2004年、127-138頁。

村松灯「非政治的思考の政治教育論的含意-H・アレントの後期思考論に着目して-」『教育哲学研究　第107号』教育哲学会、2013年、153-171頁。

森川輝一「『全体主義の起原』について-50年代のアーレント政治思想の展開と転回」『政治思想研究　第８号』政治思想学会編、風行社、2008年、116-145頁。

矢野久美子「「見捨てられていること」の消息」『アーレントと実存思想-実存思想論集XXXⅡ（第２期　第24号）』実存思想協会編、理想社、2017年、77-91頁。

山中恒『子どもたちの太平洋戦争－国民学校の時代－』岩

波書店、1986年。

注

1）共同体と学校を結びつける際に田中智志は、佐藤学の提唱する「学びの共同体」をはじめ多くの形態があることを指摘し、共同（性）という概念が協働や協同という概念を包括する大きな枠組みであると述べる。(田中 2017：377)。

2）このような観点から共同体を批判する論調もみられる。また、単純な言葉への嫌悪感から共同体という言葉を避けることもある（田中 2017：377)。田中は先述したような共同体批判を分析し、共同体が孕むパラドックスを指摘した上で、改めて共同体の意義を問い直している（田中 2017：382ff)。

3）近年の世界情勢に目を向けると、アメリカでトランプが大統領に就任した際に、ジョージ・オーウェルの『1984』やアレントの『全体主義の起原（英：*The Origins of Totalitarianism*　独：*Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*）』に注目が集まり、改めて全体主義というものが多くの人の関心事となっている（Williams 2017：7)。また太田哲夫は、アレントの『全体主義の起原』が現代日本を考える際に示唆を与えることを指摘している（太田 2004：37)。

4）本稿では、loneliness（独りぼっちであること）とVerlassenheit（見捨てられていること）を同義として扱うが、どちらか一方に定訳を定めない。英語版とドイツ語版の両者のニュアンスを大事にしたいため、本稿では、「見捨てられていること＝一人ぼっちであること」とする。このように、本稿で特に着目する『全体主義の起原』と『人間の条件』は、アレント自身自らが英語版とドイツ語版を記しているため両方の版が存在する。両方の版を扱う理由として、それぞれの版に欠けている点があるため、相補的に用いることでよりアレントの主張を丁寧に読み取ることができるからである。

5）アレントの『全体主義の起原』は、版によって所収論稿に差異があることが指摘されている（Cf. 森川 2008：140f)。初版では後にアレントの全体主義分析の結論でもある第13章「イデオロギーとテロル」の論稿が欠けている。本稿では、アレントの全体主義批判に着目するため、「イデオロギーとテロル」が加わった最終版を用いることにする。

6）アレントは『全体主義の起原』の後に発表する『人間の条件』で複数性の定義を与えている。人間の複数性は「唯一存在の逆説的な複数性（paradoxical plurality of unique beings）」なのである（HC：176=287, Cf. Va：213f=217f)。そしてこの「唯一」というのは「他者性と差異性（otherness and distinctness）」から構成される（HC：176=287, Cf. Va：213f=217f)。この「他者性」というのは存在するものすべてのもの異なっていることを意味し、「差異性」というのは、他と差異を表明できることを意味し、人間のみが持っている（HC：176=286, Cf. Va：213f=217f)。これらのものから人間の複数性は規定される。

7）カノヴァンは、アレントが『全体主義の起原』において全体主義が改造しようとする人間の本性について議論していることを指摘し、この議論が後の『人間の条件』と関連があることを示唆している（Cf. Canovan 1992：25=37)。

8）アレントの思考論は、彼女の文献において多くの文献で扱われているが、積極的に思考について論じたものとしては晩年の『精神の生活（*The Life of Mind*）』があげられるだろう（Cf. LMT：179ff=208ff)。また、教育学の分野でこのアレント思考論を論じているものとして村松灯（2013）がある。アレントの思考論をこれ以上深追いすることは本稿の趣旨から外れ、また優れた研究が多いこともあり、本稿ではこれ以上の議論はしないものとする。

9）アレントは「全体主義運動の成員にとっては、自分がおよそこの世界に存在し一つの場所を占めているのは、ひとえに自分が党に加わっているおかげであり、党が自分に与える任務のおかげである」と主張する（OT：323f, EUtH：525=3, 40f)。つまり全体主義下の人々は、党あるいは政権との関係を良好に保つことが重要であったことが分かる。

10）アレントは「あいだ」という議論を彼女の自由と結びつけている。ここにおけるアレントの自由について整理したものとして三浦隆宏（2004）が挙げられる（Cf. 三浦 2004：123f)。

11）ティモシー・スナイダーは自著の中で、アレントの全体主義分析を用いながら20世紀の暴政について見解を述べ、今日の社会が全体主義に近づいていることに危機感を募らせている。スナイダーは「最も危険な時代に逃亡し生き延びる人間たちは、おおむね、信頼できる人間たちを知っています」と指摘している（スナイダー 2017：79)。

12）第二次大戦期の学校教育に注目した研究に山中恒の研究がある。山中は自身の一連の著作の中で、第二次大戦期の学校や教室が全体主義化した空間であったことを指摘している（Cf. 山中 1986)。